

戦中戦後知識人の担った使命と役割(6)

CHOI, Seonho / 崔, 先鎬

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / 法学志林

(巻 / Volume)

107

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

125

(終了ページ / End Page)

139

(発行年 / Year)

2010-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006445>

戦中戦後知識人の担った使命と役割（六）

崔 先鎬

1. 個人的価値の実践を通じた社会奉仕―金教臣

これまで、日韓におけるキリスト教およびマルクス主義を含む様々な知識人の存在が有する価値的側面と役割について概観してきたが、今回は以前論述したキリスト教知識人のうち、無教会主義の創始者である内村鑑三に感化を受けた第二世代として、朝鮮における無教会主義の普及を目指した金教臣キムキョウジン（一九〇一―一九四五）について述べてみたい。彼は、本来の無教会主義において主なる価値的課題として認識されていた非戦論と平和主義に依拠した信仰的価値を支柱として、朝鮮の植民地状況について問題意識を提示した人物であった。

金教臣は朝鮮半島の東北部にある咸鏡南道の咸興で一九〇一年四月に生まれた。幼少の頃から漢学を学び、厳格な儒教的家風の中で成長した彼は、如何なる価値体系よりも、人としてあるべき道に準拠した道德的姿勢を保持し続け

ることが至高の価値であると考えていた。それは、将来無教会主義と邂逅することで精神世界を拡げていく彼にとつては、世界における普遍的真理を求めていくことに通底するものであったのである。彼は、人間内部における「仁」「義」「礼」「智」の觀念の実践によって、正しいことを判断し、人間的善性を拡張して行くことが必要であると認識し、例を挙げれば、儒教の論語における「吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩」(吾十有五にして學に志し、三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順う、七十にして心の欲する所に從えども矩を踰えず)といった内容を人生の道標として設定し、人間内部における仁を完成していくことが必要であると考えていた。

自らの意志と努力を絶えず人生に傾注していくことで、自然に「從心所欲不踰矩」に到達することこそが人間の存在価値でもあると考えつつ、成長し青年期を迎えた彼は、一九一九年に日本へ渡り東京高等師範学校英語科に入学、一九二一年一月から内村鑑三の「聖書研究会」に出席することとなった。ここで彼は、ローマ書講義を中心としてキリスト教信仰の思想的基盤を手に入れ、塚本虎二、矢内原忠雄らと意気投合して内村鑑三の聖書研究会をより本格化させるとともに、第二世代無教会主義グループを形成し中心的役割を果たした。聖書研究会において同じく無教会主義における信仰的知己であった矢内原忠雄は金教臣について次のように述べている。

氏は東京高等師範学校を卒業し、帰郷して京城養正中学に長く教鞭を取り、深き精神的感化を生徒の間に残した様子である。それよりも重要なことは、氏が東京留学中内村鑑三先生の門にて聖書を学び、『聖書朝鮮』と題する朝鮮語の雑誌を発行して、無教会福音を全鮮は無論、満州までも普く宣べ伝へられた事であり、氏は実に朝

鮮に於ける無教会伝道の創始者であり、指導者であり、第一人者であり、柱石であった。余が昭和十五年夏朝鮮に伝道旅行を試みた時も、事実上の主催者たり、協力者たりし者は氏であったのである。その時余は屢氏と会ひ、氏の家に迎へられ、氏と主に在る交を結んだ。敦厚にして愛深く、慧敏にして信正しく、温容彷彿としてなほ眼前にあり、年齢は余より数年若くあつたと記憶する。³⁾

無論、彼ら第二世代の無教会主義グループの諸構成員の間には、内村の無教会論よりも一層キリスト信仰心を深めようとした流れだけではなく、限られた宗教的領域から切り離して一種の非宗教的社会思想として発展させようとする人々も存在していた。このような両者の立場の中庸に立ち、無教会主義を朝鮮における思想的解放と独立運動の二つの領域に取り入れようと考へていた金教臣は、信仰を深めて真のクリスチャン、言い換えれば宗教的奉仕者になることが延いては祖国を植民地状況から救うことになるものと考えようになつていった。内村は真のキリスト教とは、如何なる立派な歴史的な経緯と背景に依拠しているかではなく、むしろこの歴史的な束縛を内部から打破し続けることによつて常に革新していくものであると判断していた。日本における超国家主義に抵抗し無教会主義を通して自主性を強調していた内村鑑三だが、金教臣は内村におけるこのような信念こそが真の愛国であり、真の平和主義に直結していることに深い理解と認識を示していた。内村鑑三の強い精神性と思想における信念に感銘を受けた金教臣は、実際の行動を通して自己の信念を表明していくことこそが、倫理の実践と真理の普遍化に繋がると思つていたのである。

内村鑑三の弟子として、金教臣は、内村の無教会主義における精神的遺産を守り続ける一方で、朝鮮に視点を移し

た場合の内村の無教会主義の政治的限界を視野に入れながら、自らは独自のともいえるかたちで無教会主義と独立運動を連動させることを眼目として活動を展開させていこうと考えた。また彼は、既存のキリスト教会に見られる絶対的な神中心主義こそが、寧ろ盲目的な人間の自己主張を生み出す元凶となる可能性について指摘している。この点は実に肝要である。自己中心的な人間至上主義が発生し、それが人間の最大の罪になりがちであると考え⁽⁴⁾ていた。ここで彼は、キリスト教において盲目的で自己中心的な人間至上主義を防止するためにも絶対的な神中心主義を排除すべきであり、無教会主義を実現する必要性があると考えていた。彼は、「教会内部だけに限らず教会外部にも神の救済は存在する⁽⁵⁾」と主張しつつ、神による救いが教会への所属有無に関係なく可能なものと考えていたのであった。また、無教会主義とは、一定の形式内で束縛を掛けようとする一部の教会主義者たちに対抗する意味で、永久に教会組織をうち立てる事を行わない意志的精神を示すものと感得したのである。しかしながら彼は、自らの無教会主義における解放的精神性について標榜しつつも、無教会主義の信仰者同士の集まりだけではこのような精神的解放の実現は不可能であると考えていたと思われる。すなわち、「無教会主義」自体から固定的形式化を否定する精神として、無限の自己革新と批判なしでは現実化されないものとみており、無教会主義を一つの新しい教会論の形態として理解する立場に反対した。彼はむしろ「我々は無教会主義者として、我々を束縛する全ての權威、並びに誘惑する勢力から自らを解放させていく⁽⁶⁾」と発言し、一種の全ての無教会主義者の立場の代弁を行ったのであった。この中で言及した「我々を束縛する全ての權威」とは、狭い範囲では一般の教会内部における權威的組織と見なすことができると考えられるが、同時にこれは超国家主義体制を基に彼自身の祖国に対して植民地支配を行使している日本に対する抵抗の意味を有するものとして捉えられるのである。

このように金教臣は、無教会主義とは全ての個々人における精神的解放を實現するための新たな基準であるとともに、それを目標として掲げた時代および世界を實現化するための価値的原型にまで引き上げた。したがって、彼に於ける積極的無教会主義とは、既存の權威と束縛に対して行う否定の意味だけでなく、むしろ新たな形の精神的絶対主義によって理想を實現するための手段であったと考えられる。特別な他者を介在させない、組織的序列を排除したこの全く新たな形の精神的絶対主義においては、純粹なキリスト教的基盤に依拠した奉仕活動に重なる「実践」を最高の価値として常に想定してきたと判断できるが、これは同時に個々人における実践的な行動様式を通して人格と価値におけるキリスト教に基づいた普遍性を確保するための基本原理とも理解することができる。また、彼は、無教会主義者は時間の使用においても節度ある態度が求められると考え、世俗的享樂よりは他人への奉仕と真理を求めめる學問活動へ邁進するために与えられた時間を使わなければならないと強調した。彼にとつて無教会主義者とは、個人的領域において倫理主義的、かつ禁欲主義的姿勢とともに、各自が属している社会と時代の中で、その社会を代弁する良心としての役割を實行する存在であった。このように、個人の生涯におけるキリスト教的な普遍的価値の實踐を通して、自己の救援とともに他人と社会の救援の当事者として責任を担おうとした彼の姿勢は、個人的實踐の究極的志向目標であり、人間世界における絶対的存在としての「神」の表象を具現化したものであろう。

2. 無教会主義継承者としての金教臣

宗教的真理を時代的現実において実践して行こうとした内村鑑三の態度を深く尊敬していた金教臣は、不敬事件と

非戦論で現れた内村の社会的行動が眞の愛国心に起因するものと判断していた。特に日露戦争期において内村が示した非戦論は、巨大な帝国主義に対する批判であると同時に、日露両国という巨大帝国が金教臣の祖国に対して行った征服支配への批判とも見なしていたのである。このような内村の指導を受けながら金教臣は、内村の門下生であり同じ東京高等師範学校の同期生であった咸錫憲ハムンフグサとともに一九二五年から「朝鮮聖書研究会」を組織し、聖書研究に専念しながら社会問題にも意識を傾注するようになった。彼らは、人間は神の愛 (agape) を実践するための道德的責任者として存在し、このような人間が中心になって一つの時代が形成されるものと考えていた。⁽⁸⁾したがって、彼らは祖国の植民地状況を克服し、これまでの伝統と歴史を継続させることが絶対者の意向を実現するものと判断していたと考えられる。

一方、東京高等師範学校を卒業した金教臣は、一九二七年に帰国し、地元の高校の教師を務めながら、大学時代「朝鮮聖書研究会」を立ち上げた咸錫憲らとともに雑誌『聖書朝鮮』を発行し主筆となって活躍し始めた。『聖書朝鮮』では、植民地状況下の祖国の社会において、キリスト教における普遍的真理について探究することを第一目標としながら、無教会主義的な立場から思想活動を自我と祖国との関係の中に宗教的真理と価値を代入させることで実践していこうとした。金教臣にとって普遍的真理を求めることは、この『聖書朝鮮』を通して、植民地状況という同時代の祖国の人々に焦点を合わせた「愛の実践」でもあった。『聖書朝鮮』の第六十一号から第八十三号においては、上記の咸錫憲の「聖書的立場から見た朝鮮の歴史」という論説が二年にかけて連載されるが、この内容が朝鮮総督府によって問題視され、内容削除と発行禁止処分を受けるなど苦難を迎える場面を呼び起こしたのである。この結果、この雑誌の代表編集者であった金教臣が不法団体組織などの罪で官憲に逮捕され、有罪判決を受けて一年間投獄され

たことをきっかけに、太平洋戦争が本格化した一九四二年三月の百五十八号を最後に『聖書朝鮮』は廃刊されることとなった。この時期の金教臣は、同じ無教会主義の同志であった矢内原忠雄、片山哲らから「あなたは主の名前の為に苦痛を受ける者の最前列に立たされている」ので「如何なる権力や武力にも屈することなく真理のみを伝えていくことができますように」とのメッセージが書かれた手紙を受け取っている。この日本の第二世代無教会主義グループの構成員のうち、金教臣は矢内原忠雄を最も高く評価していた。彼は、内村鑑三の無教会主義的精神を継承しながらも、既存の教会に対する批判だけに走らず、一般社会と政治問題を手懸けながら、宗教関係者および知識人たちの間で「尊敬を受けている存在⁽⁹⁾」と矢内原を評価した。とくに、両者は無教会主義を通して、時代を反映した社会問題について考察する際には共通の意識を有するとともに、相互理解に基づいた私的交流によって親密感を増していったものと見られる。矢内原は『聖書朝鮮』をめぐる一連の事件について、自らが主筆として編集を担当していた雑誌『嘉信』の復刊号の中で次のように語った。

昭和十七年三月三十日、氏は突如当局の検挙するところとなり、京畿道警察部に留置せられた。氏の同志たる全鮮の無教会信者も続々検挙せられ、果ては『聖書朝鮮』の読者殆んど全部が或ひは検挙、或ひは召喚せられ、或る者は即日帰宅を許され、或る者は数日、或る者は数十日留置せられた。氏外十二名の主立ちたる兄弟は最後迄残されたが、満一ヶ年の後、翌十八年三月二十九日夜半、一同無事釈放せられたのである。『嘉信』第六巻第七号所載「感話」は、氏が帰宅後四月十八日の家庭礼拝にて語った在獄所感を朴碩鉸パクソクギョク氏が筆記して寄せられたものであって、当時日本内地及び朝鮮に於ける無教会信者に対する検察当局の空気、殊に『嘉信』に対する検閲の

情勢においては、之だけのものを説明なしで掲載するだけでも、信仰による勇氣と決心とを余に必要としたのである。今にして思へば隔世の感があるが、神の眼の前には、此の時既に日本は朝鮮を失つたのであらう。⁽¹⁾

『中央公論』における「国家の理想」、そして、キリスト教雑誌の『通信』において戦時体制に関する批判的論説を発表したことによって東京帝国大学から解任処分を受けた直後に矢内原忠雄は、一九四〇年京城で開かれた講演会において、朝鮮の人々が官憲による弾圧下で最も苦しんでいることに理解を示した。金教臣はこの講演会の準備を担当したが、この講演会で矢内原は「個人と民族の救援」という主題で、全ての人間と民族が平等であり、それぞれの個人と民族は自己愛を持つ権利があるとの趣旨で演説を行ったのである。全ての民族の自主的権利と平等とを訴えた民族自決主義的な方向性も示しながら、彼は金教臣の愛國心と信仰について、次のような感想を加えている。

ナタナエルが「真のイスラエル」と呼ばれたやうに、金教臣氏は真の朝鮮人であった。氏は朝鮮を愛し、朝鮮民族を愛し、朝鮮語を愛した。併し氏の民族愛は固陋な排他的民族主義とは異つた。氏はキリストの福音によりて新に生まれた朝鮮人であった。柔和で、勤勉で、朝鮮人としての生来の美德が、信仰によって一層潔められて居た。氏はキリストに在りて己が民を愛し、キリストを伝えることを以て己が愛國心と爲した。米國流の淺薄なる基督教によらず、不信仰なる蘇聯の共產主義によらず、はた又世俗的な民族運動によらず、権力者への迎合・協調にもよらず、純粹なる無教会福音の信仰によりて朝鮮人の靈魂を新生せしめ、之を自由と平和と正義の民たらしめんが爲めに、氏はその貴き一生を捧げたのであった。滿一年の留置所生活の間、氏の態度の公明にして真

実なることは、取調に当りたる検事の敬服するところとなつたといふ。氏は釈放後、『聖書朝鮮』の続刊は許されなかつたが、伝道に従事することは認められ、鮮満各地を旅行して兄弟の信仰を堅めて居た。⁽¹²⁾

矢内原は、金教臣が無教会主義者として活動した期間を通して、自らの祖国の自主的独立を求めて、様々な方法で発言し活動したと評価している。矢内原の場合、植民地政策学の観点から、まず各共同体が自主的経済発展を行った上で相互共存主義への進展を追求したが、これは日本の朝鮮に対する支配の方法においても行う必要性があることを強調した。⁽¹³⁾しかし、彼による日本の植民地支配に対する批判意識は、植民地政策自体への批判ではあつたものの植民地の自主独立を肯定するような視座ではなかつた。すなわち日本の諸植民地に対する彼の認識は、日本の植民地支配そのものを肯定し、植民地政策における方法論的批判に過ぎなかつたものと考えられる側面も少なくない。このような矢内原の考え方は、現実の世界における個人と民族の平等についてキリスト教における普遍的平等性だけに頼つて抽象化した結果であると考えられる。ただし、金教臣と矢内原の両者間において、こうしたこの時代におけるお互いの立場について如何なる認識を保つていたかという問題は、両者が内村鑑三の無教会主義を如何に内在化させていたのかという問題と必ず分けて着目する必要性があろう。人はそれぞれの状況に合わせて客観性を保持せざるを得ないからである。

一九三七年二月の『聖書朝鮮』において金教臣は、「再出発」と題された文章のなかで、いわゆる皇民化政策下で苦しんでいる民衆と無教会キリスト教の連立闘争を宣言するとともに、無教会内部において両者間の現実認識の差を正直に認め、独自の無教会主義を主体的に受容し展開させていく必要性があるとの宣言を行ったのである。⁽¹⁴⁾当時の官

憲がマルキシズムと共に無教会主義キリスト教を危険なものとなし、このような反体制的動きの出現などを恐れたからであろう。

3. 儒教的価値認識と人間観——「仁義」の実践

金教臣は無教会主義に接しながら、自らの本来の価値体系を形成している儒教的価値観念にキリスト教における普遍的価値性を加え、時代的現実について熟考を重ねるようになっていた。彼は儒教の論語における「己所不欲勿施於人」(己の欲せざる所人に施すこと勿れ)という教えから、植民地の疎外された民衆を自ら抗弁し、彼らと積極的に連帯していくことの必要性についてすでに認識していたであろう。同様の黄金律として、キリスト教にも『Do unto others as you would have others do unto you.』(己の欲する所を人に施せ) [Bible: Matthew 7-12] が存在することと彼を一層深く捉えたに違いない。そして、「見義不為無勇他」(義を見てせざるは勇無き也)という教えから、彼は、民衆の代表として正義の実現のために戦う行動を実行しなければ、無知な存在よりも卑屈なものと判断したのであろう。彼はキリスト教における「慈愛 (mercy)」、並びに仏教における「慈悲」の観念を儒教における「仁義」として実現するためには、具体的行動を取る必要性があると考えていたのである。

一九四二年三月のいわゆる「聖書朝鮮」事件以降、教職から追放された金教臣は、同年の七月に興南の日本窒素肥料工場に管理職として就職し、日本人管理職を除いて従業員を殆どを占めていた約三千人朝鮮人労働者たちの厚生福利について要求する労働運動の現場で仁義の実現に向けて尽力していたが、一九四五年四月、労働者の間で流行して

いた発疹チフスという病気でこの世を去ることとなった。彼は、厳しい労働の現場を自らの体で直接体験しながら「學而時習之不亦説乎」(学び取り時々習い取るとまたこれも嬉しいものではないか)という儒教の好學における態度でこの厳しい現実を出迎えた。金教臣は、最後に「我が人生四十数年の間、この工場において初めて我が民族を体内に収めて慰めることができた」という言葉を残したと伝わっている。彼のこの最後の言葉は、神から付与された苦難を静かに受け入れるという意味であると同時に、自らの体験による人格的覚醒を通して祖国の悲哀を深く受け入れた旨のものと理解することができる。

矢内原は金教臣の死去後に、次のような哀悼文を通して彼の死の意味について述べた。

金教臣氏は本年四月二十五日、朝鮮興南にて天父の許に召された。発疹チフスにて臥病僅か一週間であつたといふ。余は氏と私交深からず、氏の履歴についても詳細を知るところがない。……然るに昨年徴用せられて興南の日空工場に勤務中、病に罹りて天に召されたのである。朝鮮の同志は師父を失ひたる思ひにて深き哀悼に沈んだ。その一人は余に書を寄せて言った、「朝鮮の天地は金教臣先生を失うて、俄かに真暗くなったのであります。……小生は神様に抗議したい心が山々でありましたが、併し神は御自身の栄光の為に最善を為し給ふ方であらうから、柔順に服従するのみであります。……本当に考へれば考ふる程、朝鮮最大の宝を失ひたる気が致して仕方がありません。」

他の一人は曰く、「金教臣先生の死は全くピスガ山上のモーセの死です。ヨシユアなき我らはどうしませうか。我々は今や小なるヨシユアになって、ヨルダンを渡らねばなりません。先生、祈って下さいませ。」朝鮮無教

会陣宮のモーセは俄かに天に召され、今や地上にその温容を見るを得ない。併しながら皆て内村鑑三先生の告別式に於いて、故藤井武が「之は新日本の定礎式である」と喝破したやうに、金教臣氏の昇天は正に新朝鮮の定礎式であった。氏の急逝後四箇月ならずして時局は急転し、朝鮮は自由なる独立国として甦生する機運を恵まれた。併し真に国を建つるものは、第三国の力による軍事的・政治的解放ではない。その国民自身の信仰によらねばならないのである。信仰に由らざれば、一の悪鬼を追ひ出して七つの悪鬼を迎へ入れたる家主の譬に洩れず、国の独立必ずしも祝福ではないのである。義しき国として朝鮮を興す力は、氏の宣べ伝へたるイエス・キリストの祝福以外にはないのである。余は朝鮮の兄弟諸君が氏の遺志を継承して、信仰によりて余の悪と勇しく戦ひ、朝鮮に真の救をもたらされんことを祈る。かくしてこそ氏の昇天はその意義を完くするものと信ずる。主にありて敬愛する兄弟金教臣君の靈よ、君は余に対して真実であった。君は多くの同志に『嘉信』を紹介し、推薦してくれた。君の紹介によりて与へられた朝鮮人の誌友は、『嘉信』読者の中最も真実、最も善良なる分子である。『嘉信』はその最善の読者を、内地人の中よりも寧ろ朝鮮人の間に有つ。余は之によりて朝鮮人たる兄弟姉妹の信仰を知り、愛を知り、真実なる性格を知り、朝鮮人について真に希望を有した。余は「イスラエルの間にさへ見ざる」信仰を、我らの「ギリシヤ人」の間に見出したのである。而して之らはすべて氏の伝へたる福音の果であり、氏の信仰と人格との反映に外ならないのである。

過ぐる年の朝鮮伝道旅行に際し、八月二十八日平壤監理教会堂にて、余は氏の司会の下に、エペン書第二章一——二節に基いて語った。当時平壤は当局による基督教弾圧の中心地であり、この集會も秘かであった。集會後責任者は警察に召喚され、余も亦刑事の訪問を旅館にて受けた。その時集會にて語りし聖書の一節を、余はこ

ここに繰返して引用しよう。

「それはキリストによりて我ら二つのもの一つ御靈にありて、父に近づくことを得たればなり。」之が君と余との友誼の根本であり、而して民族融和、世界平和の根柢も亦之以外になき事は、君と余との共通の信念であった。今や天にある君の靈と地に残れる我らと、相共に「怨なる隔の中籬を毀ち、二つの者を己に於いて一の新しき人に造りて平和を成し」給ふキリストの十字架を、日本と朝鮮との間、東洋と世界との間に堅く樹立し、キリストの血によりて永遠の平和の礎を築かうでないか。

〔嘉信〕第八卷第九号・昭和二十年（一九四五年）九月⁽¹⁹⁾

金教臣は他人への慈愛の実践には、禁欲的な態度で臨み、実践者自らが代価を支払うことも必要であると見なしていた。彼は自らを「無資格」と述べつつ、神からもらった慈悲を他人への慈愛として返すことを実践しようという意志だけがその原動力であると考えていた。彼は、神に対する尊敬と他人に対する尊敬が二様一元であると同時に、全ての倫理の始まりであり信仰の完成であるものと判断したのである。彼にとっては、「慈愛の実践」こそが、全ての宗教的信念において最も優先されるべき価値であったに違いない。植民地状況という厳しい現実の中で、金教臣が重視していたと考えられるのは抑圧的な社会的現実に対する批判的考察と、そこから得られた成果による正義の構築と個々人における自己の確立であったと考えられる。

金教臣は、あるべき時代と歴史というものは人と人との間で交わされる敬愛によって構成されるものと判断しつつ、道徳的真理について認識することは神の存在を理解することとも直結していると考えていた。また彼は、「朝聞道夕

死可⁽²⁰⁾（朝に道を聞かば夕に死すとも可なり）との儒教における教えを自らの精神的な理想主義として設定していたが、「道」を聞く、つまり天下に「道」が行われていることを聞くことができるのなら、死んでも構わないというほどの、実践によって世の中を変えようという使命感に満ち満ちていたのではないだろうか。力こそが正義であるという論理に根柢をおいた往往にして道徳を阻害するイデオロギーが支配力を發揮している現実の世界の不条理を打破するために「正義は力に勝つ⁽²¹⁾」との認識が必要不可欠であると強調したのである。このような考え方に根柢として、彼は、「力こそが正義である」といった帝国主義の間違った存在論理に対しては「その誤りについて世界史の中に明確に残す⁽²²⁾」形態で審判しなければいけないと述べた。このため彼が選択した手段とは、自己における内面的省察と苦難との直接対峙であった。すなわち、彼は、不条理な現実の状況において疎外された人々の抗弁、そして、彼らとの積極的な連帯を通して自らの内面的省察を可能にするとともに、不条理を實際に克服し、正義を樹立していこうとしたのである。金教臣は植民地状況が続く祖国で生きている全ての人々のためにも、自らを犠牲にしても苦難と立ち向かわなければならぬと考えていたのであろう。このような彼の論理的構成図式の中には、現実の歴史において普遍的真理を実現しようとした彼自身の主体的、かつ実践的思考の姿勢が展開されていると同時に、抑圧された祖国の人々の歴史を創造的に存続させるため、現実を克服しようとした彼の試みが溶解されていると考えられる。

- (1) 金教臣『金教臣全集』（第一巻）、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、一五五―一五六頁参照
- (2) 金教臣「人生論」『金教臣全集』（第一巻）、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、一五〇―一五八頁 参照
- (3) 矢内原忠雄「交友・追憶」『矢内原忠雄全集』（第二十五巻）、東京、岩波書店、一九六五年三月、二八七頁
- (4) 金教臣「人生論」『金教臣全集』（第一巻）、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、二八四頁

- (5) 金教臣「人生論」『金教臣全集』(第一卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、三〇二頁
- (6) 金教臣「信仰論」『金教臣全集』(第二卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、三六四頁
- (7) 金教臣「日記(Ⅰ)」『金教臣全集』(第五卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇二年二月、一四七頁
- (8) 咸錫憲「聖書的立場から見た世界歴史」『咸錫憲全集』(第十七卷)、ソウル、創作と批評社、二〇〇九年三月、一九一―一九六頁
参照
- (9) 金教臣「日記(Ⅱ)」『金教臣全集』(第六卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇二年二月、一三八―百三十九頁参照
- (10) 金教臣「信仰論二」『金教臣全集』(第二卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、三〇四頁
- (11) 矢内原忠雄「交友・追憶」『矢内原忠雄全集』(第二十五卷)、東京、岩波書店、一九六五年三月、二八七―二八八頁
- (12) 矢内原忠雄「交友・追憶」『矢内原忠雄全集』(第二十五卷)、東京、岩波書店、一九六五年三月、二八八頁
- (13) 矢内原忠雄「満州・朝鮮・沖繩」『矢内原忠雄全集』(第二十三卷)、東京、岩波書店、一九六五年一月、三四四―三四五頁参照
- (14) 金教臣「日記(Ⅱ)」『金教臣全集』(第六卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇二年二月、三六四頁
- (15) 金教臣「人生論」『金教臣全集』(第一卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、一五六頁参照
- (16) 金教臣「人生論」『金教臣全集』(第一卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、一五六頁参照
- (17) 金教臣「信仰論」『金教臣全集』(第二卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、二二二頁参照
- (18) 梁賢恵「朝鮮産キリスト教の論理構図と実践」『近代朝鮮における民族的アイデンティティとキリスト教』、ソウル、ハンウル、二〇〇九年三月、一九七頁
- (19) 矢内原忠雄「交友・追憶」『矢内原忠雄全集』(第二十五卷)、東京、岩波書店、一九六五年三月、二八七―二九〇頁
- (20) 金教臣「日記(Ⅰ)」『金教臣全集』(第五卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇二年二月、六八頁参照
- (21) 金教臣「信仰論二」『金教臣全集』(第二卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇一年五月、二一九頁
- (22) 金教臣「日記(Ⅰ)」『金教臣全集』(第五卷)、ソウル、図書出版ブーキー、二〇〇二年二月、一一四頁